

中学年分科会

授業者 佐藤 由香梨 八尾市立東山本小学校
発表者 西野 亜侑美 泉佐野市立日新小学校
司会者 戸崎 佐登美 泉佐野市立第三中学校
記録者 鈴木 宏文 泉佐野市立第三中学校
助言者 河野 重敬 泉南市立東小学校校長

1. 授業者より

「こんな生き物見たことない！」

～みんなにも見せてあげるよ！～

今回は、「見たことない生物」をテーマにアルミなまし線を使った学習を行った。児童たちは、様々な長さのアルミなまし線を触って形づくっていた。造形の「技」は黒板に掲示し共有すると、それを見て児童たちは、楽しく工夫して制作することができた。学習を進めていく中で、アルミを切断したいと思う児童が多くなり、各机にペンチを置いておくとよかったと感じた。

2. 実践発表

「和紙でつくる世界～染めるところから楽しんで～」

今年4年生の担任になり、この学年は、コロナ渦で地域交流や友だち同士の関わりが不得意であると感じられた。そこで今年はコロナも落ち着いてきたので、それを補う取り組みをおこなっていきたいと考えた。子ども同士の関わりを進めるために下記のような活動を行った。

- ① 伝統工芸品の和紙を利用した。
- ② 地域特産品をモチーフに用いることにした（玉ねぎ・水なす・イチヨウ・飛行機など）。

- ③ モチーフは、ちぎり絵で表現することとした。素材の比較検討も実際に触らせて感じさせた。泉佐野に関わるものをモチーフにちぎり絵を作成した。
- ④ 和紙を作ることにした。泉州玉ねぎと学校の近くにあるコーヒー屋さんのコーヒーを用いて、和紙を染めた。グループで相談しながら、和紙の染め方の工夫（コーヒーと玉ねぎの両方を染色・染める時間の延長など）が始まった。
- ⑤ ④の和紙を用いてだるまを作成。風船に和紙を貼り付け、だるまの表現を工夫して制作を行った。

このような活動を行うことで良かった点は、①和紙を染める活動では、子どもたちで相談しながら活動をすすめることができた。②地域の特産品を用いたことで、地域への理解を深めることができた。また、愛情も持つことができたのではないかと感じた。③国語や社会など教科横断の効果があった。

今回の学習を通して、友だち同士で考えて、制作する姿を多く見ることができた。これからも、もっと地域や子どもたちとのつながりを深められる活動を取り入れていきたい。



3. 質疑・応答, 感想

質疑・応答

○ワイヤーアートは、教育課程では高学年が行う内容だが、なぜ低学年で行ったのか？

→図工が嫌いな子でもできるもの考えたときに、アルミなまし線は、何度もやり直しが効

き、取り組みやすいのではないかと考えた。

○材料に触れることは、とても良いが、評価はどのようにしようと考えていましたか？

→評価は、後回しにスタートしたが、タブレットのドキュメントを使い、「どのようなだるまにしたいか」「どのような工夫を行ったのか」をまとめさせて評価をした。

○児童はとても活動的であったが、前時の指導はどのように行いましたか？

→手本をあらかじめいろいろと作成しておいた。自分たちで進んで活動してほしいので、活動の際の指針を示した。

○図工では、自己決定が重要であると言われている。自己決定は自己実現につながると良いと考えるが、どのような自己実現が良いと考えますか？

→子どもは教師の想定を超えた工夫を行ってくれた。地域理解は、導入にとどまると考えていた。

感想

○子どもたちは、最後まで意欲をもって取り組んでいた。材料に触れる中で遊び感覚での取り組みがとても有意義だった。一生懸命頑張る子どもたちの姿を見ることができた。

4. 指導助言

「こんな生き物見たことない！」

はじめは、アルミなまし線は難しいのではないかと感じた。しかし、学習が進む中で、ある児童は、「羽を作りたい！」と作りはじめると、そこから、四足歩行に変更したが、しっかりと立たせることができず、試行錯誤をはじめ最後には、3点で立てることで落ち着いた。このように、様々な工夫が見られ、子どもたちは、想像を超えて、材料に触れる姿が見られた。

道具に関しては、必要な子どもには、渡してあげ、助言を行う形でよかったのではないか
と思った。

「和紙でつくる世界～染めるところから楽しんで～」

総合学習のような学習活動だった。洋紙や和紙を実際に触らせることで、和紙＝伝統工芸
品という実感がわくのではないかと思った。子どもたちの制作意向をたくさんひろい、子
どもたちが「やってみたい!」と思ったことを実践できていた。そのため、子どもたちが、安
心して制作を行うことができていた。

